



慶應義塾大学ビジネス・スクール

高倉銀行 蒲田支店

5

井川弘氏は高倉銀行蒲田支店の支店長に就任した。前支店長からの引継ぎを受け、副支店長や課長から蒲田支店に関する現在の状況についての報告を受けたりして、着任後の2週間が過ぎた。しかし、彼の前任地であった横浜駅前支店に比べると蒲田支店の雰囲気はどこか活気が無いように感じられた。そこで井川支店長は、今後のコミュニケーションを

10

良くするためにも行員の一人一人と面談することを考えていた。

支店長ポスト

あるベテランの支店長は「銀行に入って最初に役付きになった時と、支店長になった時の嬉しさには格別なものがある。」と井川氏に語ったことがあった。他の多くの企業と同じように、銀行の支店は営業の最前線であり、その組織のトップたる支店長は支店に関する大きな権限を持つと同時に全面的な責任を負う。つまり、支店長とは一国一城の主人であり中小企業の社長のようなものであった。ただし、社長と異なるのは支店長の任期が平均して2～3年という限定された期間である点であった。

15

井川氏は大学を卒業し高倉銀行へ入行してから20年以上を経て、この念願のポストについていた。前任地の横浜駅前支店では副支店長であったが、やはり支店長と副支店長とでは権限も責任もまるで違っていた。支店経営のすべてが支店長にかかっていると言ってもよく、井川氏は、支店のすみずみまでていねいに目を向けるのを自分の支店経営の基本にしようと思っていた。彼は支店の預金や貸出の数字を伸すと同時に、蒲田支店を他のどの支店よりも明るく、働きやすく、風通しの良い場所にしたいと念願していた。

20

25

蒲田支店

蒲田地区は京浜工業地帯の中でも特に中小企業の多いところで、個人預金と法人預金の比率は、およそ4.5対5.5であった。また高倉銀行の国内約300支店の内、蒲田支店は預金では上から50番目、貸出では30番目ぐらいの位置にあり、かなり大きな支店ということが

30

このケースは慶應義塾大学大学院経営管理研究科助教授高木晴夫の指導のもと、関邦男・中西吾郎の両氏によって作成された。
著作権©慶應義塾大学ビジネススクール, 1992年